丹鶴叢書

草根集 十三

093.1
2006
佛教大学図書館
2005494879

草根集第十三

長禄元年正月朔日試筆

春朝日　久堅の天の戸出る日のさまをそ照そへ清き世も見る

春夕月　ゆきもこもる三笠の山を出る月をそ待つ春の夕風

春祝言　さしくるくさそいそまとる君が世をいはふ春の初風

二日月　そのそらくもるまの初日の月必みえ

しそらくもるまの三春のあさ霞るそもいとゝ

そのまゝ雪そそらもちの月と二日まやる

十二日淀川右三郎佐義鏡家のそ好そり春松

契齢そのそまを

君が為もる花さく松そのかげを汲てのまゝこん

初春天　もゝとせも是を一もと久くこの天ぢ〳〵ゝりよそのもつめ

池数冬　ふゆのうつまさる浪の水底より花を今のいさこをそもつく

懇切亦　身よりまる句ひもをき侍ふく松ふりぬるく川ぬ

海邊松　神の世のまのこのかこうまるらんまを神の法後島まう

十三日平頼資をくり遣さるゝ中ふ

樹陰殘雪　松ふもの雪あの氷をなくる夏なきまのもちよまふあれ（末）

窓草亦　門をくちのく車ハこもむもも変ふもちまのまう秋をいしし

雞鳴告曉　おのもも白き月松の声をるハゆるさうをいて告らむ

十六日或所よりく遣さるゝ

早春　いのまくく七十餘七くさをまつむまれまふくん

夕落花　花の枝よ秋くるゝるもゆくハいくちくんちの山を

別亦　をめて行きり別よ秋雪の昌さんはの雪をたのめと

関路嵐　お坂の秋軍るやちくさんはのあらのふるき世のあま

廿日招月草庵月次ゝ

毎山有春色（當座）　ものそのむしは深の山なぬしてなる主雪ふ秋巳（人衆）

立春　もち家なる月影も風もちまといそぬまるき世のてふ

燕来　秋き日の松のあよう科て燕あく社をのもつのを

亦　鳥ハいくみのふるをくきく松ふるる神ふくハこそ

島松　独ふ法やもまるき世をそもれ小島の松のんふく

廿二日畠山修理大夫入道淨良家の淸水の小
浦　鶯　そのそこここの梅ごとの浦の邊のさへづる聲のこゑ
菫菜露　品一本移すの數の家ごとに打つむもち衣を
老　恥　もゝをまさよも我世もふるに八重咲そうを
曉眠易覺　梅花ようそ先のる梅よそ現うたなまよとゝもし

廿三日恩德院ごと寺ごとくへごと會をしよ
朝　鶯　數多もちをかひなもく梅風聲さそくへ花のうちごと馬
梅　風　梅ごその月を匂ひのあるまでそよそ花のもとせ
浦　船　うけごとごとの浦ごとへついつまでねる波をもつむる

廿三日淸水平等坊円秀月次よ

春水澄　水面より底までの水光ともをほむる滝の白ゐ
初　春　當坐　山のやまをくせの雪のうすみ出るほどもまだのまる
岸　柳　ふつ雨の雨岸のみ梅まもの花やかうらなみ
適逢恵　ひとの遊もの法もむろみなごとふ花も汲手とく梅ぬる
閑　居　住ふの八重ふん靜ごとの淨ごとて風にしぬ

廿七日菅原元貞ごとへ淺ふの井よ
春　比　春比ごとごとの日ごとへもつてをそよ雪む風そ雪ごと
客鳥恵　ほやらごとみのものとをるぬごとそ本の梅よむ花
述　懷　くへごとをむるへの數ごとふ入ごとごとうさのごとまごと

廿八日日下部宿禰法樂ごとごとごとめて

初春霞　霞ゝ日影を雲ゝさゝめの袖もゝ笠もをひめて

祈身恵　古川や杉の(の楽)ゆふてもゝんいつ二なのなゝ葉そ

故山猿　おく山の苔のむしろの岩枕ふうくそひるまゝらる

或所ゝ月次そゝ小

多年翫梅　年毎ゝ梅をいとゝめそゝ松梅とまゝくもむしゝめる

早春水(當坐)　まゝなゝぬ袖そとそゝよ花の影ゝまゝのそゝゝ

海邉恵　ゐゝはのをゝそゝふ浦ゝるんよせもんをゝ乃ゝ浜(し楽)

島鶴　雲路をゝ独やゝよ仙人ゝまゝる人ゝゝ杜川も鶴

二月十日ゝ杉大神ゝ社ゝ楽ゝ

月次そゝむゝゝゝそゝゝ

遠望山花　ゝのふゝもをゝ山桜咲ふゝう浜(も楽)をゝゝぬをのしゝむう

暗天帰雁　咲ゝ浜乃ふゝかゝをゝゝのふゝゝをゝもゝおふゝそ(き楽)

社頭祈世　神風も宮(ゝ楽)のゝゝゝの世ゝゝそゝふゝおゝゝゝそゝれゝん

初春(當坐)　春　新ゝゝふゝゝゝゝゝゝやいをゝふるよゝゝの川浜

遠恵　乙女のおふゝ色ゝもめよをゝゝゝをゝ絞ぬ雲乃山

橋　もゝゝのゝのゝゝ橋ゝる人のなゝふゝも先ゝ渡ゝふよ

十二日右京大夫勝元家の月次よ

春色浮水　杉浜(の楽)ゝゝほのゝ花ゝるのゝそゝゝかゝるやゝ乃浜ゝ

山霞(當坐)　恒ゝゝる人の社ゝゝみゝの原ゝゝの松山ゝゝの八えゝ

翫月　月ゝゝゝもゝゝゝる人を慰めゝ共ゝ月やゝめゝゝん

初　思ひやるそらも松山なみこえて浮たる島の波ぢ人
羈旅　旅人のそふまる日ごろしげきをもちぶ宿やうほし
十一日平野次回季ごの合をくしとそ始ぬる
古郷春月　世をうちのむりおたやあこん記はのもの月の昔に
花下送日　あかうつろよ花のちるよおる日数やうをもまほらん
恨不逢恋　さよ衣ほうと思ひ初ふそひあひくきゆるこの紫
十四日朝よりはゝ病なるよ妻と十六七のちいをそ
うかさゝとみそうとくのらふひはるをもふえ
犯なりしおくあるをむいをうつとうをひやさまそ
あるうるも蜂らうはるおのもを三月十四日

はさうとなるとをもうるも再のおそなるうをは
三宝院准后一覧　門跡称くあのうち
をうう九品の海苔をおくへ一あるようさとてあの
うををへおくこのうとうて十をの海苔を十をの乃
おのようみうくふくさうあるうくぬうは
使をもうをくかさはくうの
さとのう　小の海や郭あのの後施さくをせくるさのう風
社とのう　社との海乃をこのうをおふる波もふう社記さおもとる
いをの乃を神風うを出うをへいをの海のほうはふみのとうさく
いつもおう八やうたつのまやくはをうもあつうもあやうの舟人

仲夏のころ 笑根法をおこなうに 二つのあの神の小高の延のるもを
なんとのの 小法のるもをかうとそそ狩そそしさささ式おまよ人
ふうちまき 人そそふるまつまきの深名いさし也るまの廿の緑を
おをのの
婦乃ま まきつま狩を深まの秋のまのなるぬる廿のふう八
かきはま あいふくひつまさふるおちのの引まのかさのの乃ま
ふりま 仏そそふきぬ狩ともまの学よかるふのうまふをおひぬる

比奥のおともものさおくと学会なふくおまうまう

七歩のまち乃ふくふくふくふく

三月のまつふくいさふを出しぬふまふ小修理なま文合
産の花いまふ名おおるまさまふる年学会ま

ふまふしの狩よもまそそまるふしぬ狩んち狩ふ
ちまふまふしまおまふ花のふおもゆふそそち
なふおまふえんのふくまてのまきまるそまふくも
をふんまおふ五十ふふ深ふのおまふしにおる

初 花 清呆ふふの狩のふまふ又ふそそ学ぬまふまの和も
曙 花 小のふふも学ふまふ裏を句いおふくぬかのいふくもふるのまう
浦 花浦つふく桜のおふくのおまふも小のふいうふるふ深
囲居花 学ふ八狩おふふにふまふおおてふ小まふふふおのりけよ之
花形見 あもまよ花のふをゆつまをふくまりまみのまふの月

廿白まふ乃月次よ

三月分
浦春曙　雲むらの花よ桃をそそろそろ明もてぬきものうく人
樵路巌　山姫の衣のそよむさえのゆうそまさきたのつま歌
通書恋　やひのたきつをうつさきの語もちれと流やわつて
子日松　玉箒なつもちくまのまのをそめやくもの歩きらる
桃　花　山里のまさてかなくもつさう桃の井とるもう
急別恋　夜くの袖のうほそやてのつるもそぬるもお風
古寺鐘　みとのかさきの続も山あひをめつ川風てなさそみむ
　　ホ五日西多遠俗うる亜つる収そて人くそ雪ホ
　　まるそく清ふよみ一中に
初春霞　雲鳥のそこのもも風雲きそたうそのもそ指ひゆく

水辺炎寒
藤花繞庵　花のそも綱谷川をお没そむうひの亀の初よふもちなそ
家風恋　そもるさんのむやまちんやぬくの風そくも
古寺嵐　雲ほる川浪も落しおろ秋ほのむうもき嵐ホ
　　そそ初を雪池ほ落るたむくま雪もやそうぬ
　　三條西洞院のる亜なる亀宝まそうく四月中を
　　雪一位るなともさる初ホ神ホ法楽こに
三月九日
落花風　すのふもも気まもよう指そものふるて乃空
春田蛙　そのよのまそろろよ秋回るい林そそてる雄ふ
家身恋　ぬうもやもそくう恋の宿なぬもを浪ふさやせも通
當坐
花春友　売るを花ホ友もふそやつ学りをくめん

終夜月　日もすがら雲やみさらん浮雲の風ふきはらへ月の影

雲鳥恋　あまぬるの捨るまこもよもつ山ふるのみどりに巣ぬる

島　松　垣をやそこそこ松ばかの神苔ふりる浮島の松

四月八日灯明寺住持宝舜修理大夫清祐を

しのぶ一座あるじ

更　衣　やへ霞山もせきをぬき捨て声きそふ郭公のなく

雲獣恋　とめつるた、もまろ山なる斗松ばをもむ宿かりそへて

路　芝　やまぢさきそふ乃そ芝をふるぬるふみ〻重ふん

（ミ楽）

九日恩徳院のう合

二月か

春　草　荒小田やゆくよもなき掛ばかりに民のそ業と

（そ抹）

遅　日　新日影うるそ春よ松まつ恋のこゝろん雲のこのも

春　恋　霞みつ花そこゝろ伊勢の夢語まつものこゝろ

十一日壬生をの森をゝくかまくらなる山ふもとく

人〻清ちよみ一ト中よ

首夏藤　落りけり葉のしたの夜夏のもよふてぬ花の浪々な

夕立雲　村なくぬるふ雲ふゝもとくゝ夕立のやるるさゝく山風のさゝ

雲柏恋　雲あよなるゝ柏のぬるをゝくあるぬるさの雲ゝ

懐旧催涙　古寺の昔をこゝみ一なき人をあるこに涙おちそよ

けるつゝむこゝろ人あるこみつゝ涙ゝ

そ一人もなきふるこゝみつゝや

更衣　きえゆくもやのこずえのうすみどり　鳥のもち来る衣

家菖蒲　ふのをもちふじとかくやきん匂　（ふじ二本）

述懐多　おもおもく老ぬるそでをあさ露に　（朝）

ある所にて人々に遇ふことよみしふ

柳露　をみかるる枝のもろさのうす露にそこるる

梅雨久　さくらさく山ぢをよそにうき旅の枕もれる窓

籬菊　そこもぬる露のまがきも浮ぬべし　（袋歟）

窓藻　あさなさなうすくこほりし水底に　（八本）

暁山　山のはをいでし月のそらかくまで　（空）

十日立秋大神宮法楽会

河五月雨　さくられぬさるの川えのふし橋もうきまでかへる浪哉

野蛍似露　つきかきえ夜半の月のうすみどり　（空）

待不堪　たのめしにもぬるをあき風よ　（空）

十四日当徳院のうの会

夕落花　（三月分）　ゆふ日かげおそきそらにも花のうすくうき別れかな

野雲雀　ふりはえをおもるかあるむぎ畑も　（麦）

旅宿雨　秋の雨よさそもものふをやりぬさて麻衣きしぬれ　（麦）

十八日紀元盛八幡宮法楽廿首和歌

首夏新樹　八幡山あまつ風のかぜ吹ぬ　（空）

薄暮遠望　おなじ南の山のあなたのそらまでの梢むらさけ

廿日草花月次よ

盧橘驚夢　風をる花橘のかをるの芝原ほととぎすなくやさつきの

杜五月雨　着そつ暮る日をふる五月雨ふりつるそおもき夜まの杜

返事增恋　ほととぎすなくやさつきの一聲をきゝしより（八類）

當坐
朝霞　まてくるものおもきの窓のうちにあつてくるのかをる

水鳥　鳴の物のをのそよをきの氷よおもるさむくさ

山家　ふるつもるそぬる山のおくの庵せをふるひさしいくよもる

廿二日或所のそろふ

林檎　ゑるやうの露の珠のをの清しをなるやうまのもち咲くもむ（仁類）（ろる同上）

暗夜蛍　いつくよりのくのやさをしくも星るおよ堂そふん

（手柏）

恋　鏡　匂ひてるるを恋のをとみるかみの影も我をうつりま

當坐
菖　蒲　ふやの類　ふ我てくく軒あやめをかるそともやうくくのをを往ん

夕　顔　こひしくるもおくそのをの軒（ろ類）そやもりくるもの夕鳥

宮山恋　せくみとをよやをまん奥山の宮垣もむ宮のあるも（よ八類）

谷　風　吹るそのあを夜ふのて谷ふさのるさその秋のせ

廿三日恩德院の哥合よ

四月分
夏　山　杜ほととぎす荒やまのんおむ少のをのしをを（ろ類）

夏　鳥　榊をの鳥とくくそ訪そうつきのををさしてあるを

夏　恋　我つまもむほしくまつ宵の更るふるの移のこそ

廿四日修理大夫の家よく後朝のあるとみ

水辺卯花　流つをうのもゐるまであり清らなるのやうな
泉忘夏　拍子ぬきにてよみ侍りける
雫拍ぬ　ちる世風涼きや又うつも稀乃をのそる秋
旅人休橋　題をかまつきをもとやうきを橋の中よい並へうる旅人
廿六日清水月次
盧　橋　本歌の詞を用ひ橋のちるをぬかるまほしみ白ゆき
五月雨　毎夫
ひのみの乱夜こそ涼なりし橋そもひくさみをの比
逢　恋　人こひうさもみそ橋のえを折つとへやもん
若　菜　當座
絲のめつまをもつそるやとる葉うくるゆふの雪を
夏　草　茂りつもるまぬそなりんさゆう花のそうきて

初　恋　そらかよふ恋のやつてよもむゆをへくるさんつひを
羇旅　旅衣うらみまさるそ夜る鳥のよの記のもう涙をもつ比
廿九日小笠原侍従入道浄元明栄寺まうく清らうあるそ
深夜梅　みん人の社のまつ山梅そよ香める月もほさよの更
深山蟲　世をまきそ太山の杜のさをり小妻恋なるぬるをやるらん
寄蝶恋　月そのくのもりぬる袖のおのよ新むるそうつろよ
往事夢　ぬる夜よみるふるをほよく覚るをそのをそ袖もちぬ
六月四日大光明寺まうく寺まうくそをし
郭　公　ふるもそをそ涙清てう波のこなるふりそ

夏月　ちぢまる影もなきしづの夜ぞさのものやの月のさゝ風

磯松　おきつ浪なしとやまるさの松のまもやなのまれ

當座 蓮帯露　露おもき葉のまろもの末にくれなゐくさ花よりこぼる

窓月見恋　宿の月むつまじ文をそらんぜよ乱れ初めしくもる人

窓河待恋　名の石よさゝるやまちん梨子のまゝの川ふ称

岩上苔　いのまゝ後の世をもちぬ苔の松ぬ緑そ

五日修理なまの家の月もみず

夕蝉　蝉の入日をそこそ松よ悲るまるむくろ〳〵乃ころ

納涼　すゝまるこもかるをの夜衣涼くをるあさの汲せ

野水　もたのとやの水の捨さへ新ぬるまこもる汲の家

當座 早苗　水のうち田中の秤の雨もおとこぬる苗をもつま向也

羇旅　露もる独の松の新ちをそゝき夜よ仮うちやちん

夕野　烟もなきしいつ絵よう門松もちん名ぎの秋之

神祇　天くる神のいさをしそのその社をおし誇もてさる

六日恩徳院の宮令よ

五月ノ 水辺蔓艸　雨よまくさのみまさのる浜をかくても詞の体むは隠

里蚊遣火　名よる空おもちぬ蚊をそるるまるし夜のたつ

原上行人　うちぬ〳〵を指すあをハ條原や夢ぬ社そ安も時也

九日藤原久慶をゝめしくそよ

松下水　松そるるしあひのみふあみるもそゝき夜ゝそむくる

行路暮衣 風涼あさのき衣たそぬきも着るを浴のこ秋乃棒
家の鳥雑 みづ〻しく乱まつ山るるのまつもりまもてたのむ花のる
海邉霞 もやるはる霞とまる野の庵のうくひすおとしれ
屋上夕顔 枝もふく絡ぬるやのつまきまれ教るる夕
水鳥數多 霧ふくく本葉も浮水鳥のうこまを拾ふ冬の山を
家の海恋 神ぬる多みつよかくはそもきをまつて
古郷嵐 うみやまをこ雪まるまて山の嵐のうまこ
十日高松大神宮法樂哥合
氷 室 夏なるまを入くおく氷や浴の下をとう呼
夕 顔 山陰の庭まきくに拾ふ夕のもの

古 寺 まれ星をうきの山嵐とう拾寺にけぬるも
十五日あるふ秋まく読ふあしふ
首 夏 まいぬ夜の読も星まき夜の歌るやとのまう
家衣恋 もまふ衣のうよまる神なう秋のう秋
旅泊舟 もの〻や教きふ〻今夕浴きぬ夜の松の夢
廿日草尾月次
窓 蛍 れ雪かなるまきるもまつめぬ家うちや
納 涼 なきのをうみるやふ水もまきることさぬる
海 路 まう浴ひ毎の緒まも沖の入日のまきまるこの
當座 山 霞 時もぬをまもまきて山すくまむふのを空

奇山霧　そこ後さき松のつゝそやまもさき霧よ色しこつの浦風
増恵　くゝ彩そこほ神あるほの一入よ多そゝそむのよそその衣ま
懐旧　古への無よこうまをかくるも秋偏よさゝそなさまし（ん共）
廿三日　恵徳院のお会よ
鶏川　そよかくよ鶏毎のうまさしとくもよ縄くくくよ川風
晩涼　松の後をめとなまる久風と氷このくくくくくく
別恵　惜むもそくむくくあさゝそ後衣おもひ出しむ
廿四日　ある後くく後ぎおあくーお
鶏川毎　涼もなく後よ入なうまつるうち松くよくくさ毎さ
宮の笠恵　後るむおのなく氏社なさぬ出笠しからま城の雫（多本）

釈教　大そよめをとそもくくくくくくくくくくくくる（典）
廿九日飛鳥井中納言雅親郷よそ大神宮石清水
参宮法楽そ歌をおくる（侍二本）
恵をまさゝぬ以の氷川氷なまそ雪ふるらん（典）
後朝恵　新の新後をー社をそ毎さめて後るよ
祝　おなくく後もくよかなよそ雪新るまそさせ
路　蕨　さをそのふつるそのふ荻系露をもよむもー秋せ
橋　雪　後ーよ打めをて橋杖をふってをもふさ山の
残月越関（楽十七）お坂の関後をいておくるらん彩よのくるあさぬ月
七月七日将軍家の居不俗まさ市新綾のる

ア條理なまの家ゐく七十そその淺ゐそ㠯よ
待七夕　ようるをまつそ沖よ船よそうつしの天のの舟（ふね 爽）
七夕後朝　星合のそのまゆそさ八又つりぬちのそる名やそさ
七夕祝　星そ淺る名そ私を勤そ㠯そそみ星そ合のそ
同日ある人法樂そそ一そそそめーふ
七夕天　ばタふそさそ私そ晴そまも星を清ー天の川（つ 爽イ）の舟
八日日下部敏景そそめーよ
深夜月　そよう家ゐそゆる私せのおそさへそのる月氣
客旅亟　多もみそそ〻枕（よ 爽）をおあせ思ふそほよのるる八法
旅泊重夜　おそつ風追まもまの湊舟かそそふるき枕（ま 爽）なるを

十日高松大神宮法樂ぬ合よ
新秋露　私そる多あのゆのふかる私系私そそり
秋夕風　私の風秋よそるるそを八の淺そさの世客るむ
客月亟　月法そ思へをかる淺をのそるをくをそそ私を世（一 爽）

廿日草庵の月次よ
萩花盛（盛 閑一本）　くり私もそそ萩系花のゆろもそ淺る（ろ 爽イ）ん
山秋夕　私のそよつよ山も音霜のそそるそ淺ぬり
社頭祝　なそへく私系多そ私そふるそしたりあへの私
初（當坐）春　も空まるつのそへ人を淺け雪あも法もを八そも
秋田　露なそさそ稲雀よ色の数そりまそ小田の私を

厭　恋　思ひを世中をうき我なからもゝくてそ契初めし

山　家　山里の竹のまろ屋もりみのかくをもてもむを世ふるものうき

廿五日山名公より補改清家へ招くるをおもふ

初秋月　宵のまの雲の浪路よる月の西へて秋ぞきぬらん

草花風　まそでさへふる世の秋の風もの宿とまもるをしる

客の道祝　るとよ神をするつよ(の楽)ゆるさ道あるおくの世を

早秋恋(當座)　吹風のまるよもをしら萩のそよ(の楽)山里の秋(白上)琴神けむ

惜　月　雲よもんとは秋のつるそをまをて入山深く月ある共

待　恋　待もぬ秋のまの苦よるも袖よほしそ行はの戸を

岸　竹　暁のとのまをさうて行のや緑浪てる指るそる

廿日ゐる法の月次ノ

秋　夕　うき身ゆへ思ひも秋なるんよも思ひさめるらんるの空

稲　妻　ふる思ひなつまの影そてそ案ふるとぬまを山乃まの門

秋　恋　挽ふる袖ふるとこそ秋もをもてふよ秋をめくる

一村薄　雲るまの一むら(すゝき)薄乃つをしく秋も衣そそる

雲の風恋　おくるも人のそうさうさをのこものとふく秋のおくや

曙　山　家　あめよ秋く(いつく一本)袁よふるらんまほの山乃おてほの雲

八月朔日ある人のもとく一座あるとし

暮山聞鹿　そのふもとおろぬまあようもこいく人おの待よ庵やるらん

深夜雲月　名るともむさよもまに秋文くるもの風よ宿る月影

窓松祝言（ナシ）
當坐 暁立秋
獨見月
窓遣水
社頭水
十五夜草庵にて人々まつことおそし
三日月玉垣
海邊月
故郷月
廿日草庵月次

古寺秋月
窓月恨
當坐 袖露
窓鐘
山寺
廿一日右京大夫の家にて漏の初
月出山
窓（軒ノ誤）警
孤夢易驚

廿二日 忠治法度のお令よ

田上秋霧 胡月新そうるやうの雲よそつく秋の小山田

野分後月 やう薄そうよ吹そうふもう吹そう新そうる月乃国つる

遇不逢恋 もう忘ぬそのおもりのそうせ一面おもうそうこ人のそのそ

廿三日 日下部敏景そう月次よ

秋田露 おう国そう民のそうむ(うま)あせやおおおうるんうのこの雪

月前鳥 みうものその波そうもうれそう月うやそうこ反るの羽衣

宮神祝 神凡のようせそうこのその花を衣裳のそこおそうれる

当坐 初秋萩 文そぬ風なぬその萩のそこにそうやおやそのみる

宮獣恋 夜の空の雲のおそうそうよいるとおの庭の波心

山家煙 山里もおうそうもそうそうたくほの烟とうふとい消やや

廿二日 清み月次よ

有明月 玉ぬのおるふたうぬ(へ楽)もそうその月う雪そ文そそうそ

露底虫 そのおつりし雪のみ底うるとうほめても吹いるうん

当坐 山館秋 住和ーのそうよう秋のかうよ吹そう宿そうり

萩 うる家のそのつよおる荻のえのむやあねよをそうん

葛 露雪も嵐そう吹おそうみおそう葛のもみも

厭恋 君そ狩我とそむる恨こいそうくそうかへ(もん)の鉄火

橋雨 苔深そうおの和ーおそうそうあうーふいそう雨の足ふ

廿七日 忠敬女浦の家の月次よ

初鳧 いるくるてのそ衣掛よの世社のそをいせてまりんも掛

見月 光のた月のそるめよあそやもそ人よるしむそ以る

神祇 當座 をそまそあそ人社そあそ秋のさ玉ものかめとそある

荻風 風そ人荻のなそぬ夕雲そ月のそ深そ暮む社い

雲の菅垣 我つとそその小車をそるめもの人そる月白くく

市客 走の坂をそ行もそ人市人もそ見へをものくるそさ

廿九日源貞興 漬かう社申よ

初秋嵐 そまをもそうむ社の神前おそちそる氏そとそ

河紅葉 立田川秋氏も中ぬ雲そそくもそ玉以海りそ生と

尋 立門毎よそ宿そさよそ人志消りぬ注よそほ

名所浦 あなもくのくのたり日ちぬおそ葉そそ住その神

晦日鴨社之基をそ一漬かう乃申よ

早秋水 光あまやんみの多秋のそくおひつこぬる玉のそそ乃葉

雲秋風 志行のくのそのたかそよ多見ふるまよ秋風そ以

秋田家 小庵なく光の枕のい秋そを山田りるとよそるへりつる

九月五日俊成卿家の月次よ

菊 露仙人の菊うる市そ花のそのおあむる新日さ等う

秋月冷 さよ風もえそやまの那のさ延よ月の新く秋のまつ雲ま

暮雲 かるらんやそも契やおしおくうのそ辰のタくれのもち

虫 當座 怨注とそもちやのそよおる松そのあそもうみて須のそるん

無厭暁恋　まてしもし鳥もこゑをたてつるしきくしり
遠山松　こるみや岳のそるこめふるもまつ世のそてそる松
七日ある所の会
田上鴫　明るまてかくや百羽を住つくらん田子の時うむ
山紅葉（葉黄一本）　星るなる夕日のそこ深き谷のまかきぬ時るを
祈逢恋　くしる神のつさむる道なくぬせの松のみつきまつを
十日高松大神宮法楽の会
行路霧　山深り苔のむしろよ敷わひて夢のうき世や
江上鶉　冬の里鶉なく野の雫ちく入江の稲とりるあき風
雲の秋恋　雲風も松うき月の夕ちやいかにうむ

山名弓張か浦　定家卿の歌をかを歌を所を
あるらしふるく浦そるる
旅人のそるてくる行くの神のまれ乃浦も
十二日当屋廿日会
待夕恋　契てたのめて待夜日ありておそくまのも
都（当座）首夏　影るらまやう月の松るなく松ちく鵑をのく人
被（ナシ）獻恋　うらめやるる会をかなるうちをつまちくもくるる
初郭公　神さるなまもめくやはるくまのうつまふをもちて鳴
採早苗　村風るこのぬうまを名すそをきの沢田ふ苗か

古寺橋　久米もとを三むくまをくさをふみつくきのやその岩もと

十五日或所にて

萩音近枕　ふしをきの夜のこ風よ萩のをもとのうゑまくこのか

隔夜擣衣　まくらなる杜さう衣きぬのをとをやよへてさ寸ふけをそ

寄払恋　もくなくぬれの杜木(そう実)のくちやこひさるよもきをあるら

嶺樹猿　みをふき嶺のこ木のちのこ猿寸ちる杜を又をふをる

十七日こゑお浦の家の月次よ

暁聞擣衣　ぬまくて後まきもむく板やの衣うつこんみ秋のさとく人

露染山葉　ぬるゆくこ後のやふぬまきくをく一入ほの杜のまきち葉

寄日祈恋　たのめつ日をれをまついつの秋日の朝よ秋らん

子祖

當坐　閑逕薄　石こさ苔る羽風よこしくもるかさ庭の景一めと

立名恋　よるまこつる我ものまこの名こ流くあるこ沢名

旅泊舟　大舟のほこまこ身いまるこ浪の里よ寄くこ世学

廿日草庵乃月次よ

擣衣　月そのも田の衣うつこよ杜こ浦ふ蓬生の宿

紅葉　ぬ一本時る秋くよ人のこよなこ塩やもの杜こをほるらん

河鳥　なそふぬ岩波白さ山のよ落るみさこ乃くる杜こそ

當坐　原薄　秋の風をものこの落ちつのふおくる袖ちぬまもほ

秋霜　あこをまこまの月ふつ後やまおまこよ秋あるらん

秋尋恋　そこまよもしのきるくをとさふもこふ宿そあるんもる

秋犂亟 稀(来ナシ)なるくもるのをのもさまをおるまでくもまでくてそ
秋 寺 川とかさきのをゝ雪ともぬむよ雲を寺をのせ山
廿二日明堂まく遠ものあるしふ
江 萩ゐる秋の入江にさゝりみよ牡鹿おる里の萩ふ
暮秋雲 あをやまき社をおるくりをのみの時るしふてのあ
釈 教 まゝみても我ゝおおむきほんいんまをふ
廿三日恩徳院のお会よ
櫨紅葉 もをのるもゝのをまのをの歌ゐるる牧やゆこの村雲
秋朝霜 挽ゝをたゝをお結の杜の雲ゝさいる葉ゝむもゐくるらん
望遠帆 おるゝもみをぬ入日をほよまゝく漏ゝさゝ沖つ舟人

廿四日はゝ月次よ
紅葉如錦 三田姫やこの頃のゆふ旬ふもみちのおき武衣を
鐘声送秋 うゝさいにこをの及ゝんほまて行杜ゝこ入おいのの
客海亟 おゝゝる恋のをゆふ牧行ゝく延のたくてふ縄のうゝ八
風告秋(當坐) 注みふやまふも杜をゝふんまを鈎ゝさぬ萩の和風
馴 月 杜をゝ月まぬまふ衣まのぬまて指るる武衣を
客山祈亟 幸おゝ八神のゝ客の山雲もこをを住くよいのる杜ゝさ
田家興 もゝるのゝをぬをなる亟ぬゝさゝ刈田ふつる杜の稲ゝ
廿八日日下部敏景興行の月次よ
紅 葉 浴ゝぬおまのゝこの浦川やなゝゝをの時るなるらん

暮秋　露霜と消ぬうき身をおきて先の枝こえ秋やわかれん
初恋　まちつぬ恋ゆゑもむつ二見をふた夕めぬもせんそでのきく
暁更擣（當座）　おなじ日の光やうんそ千月影をあさきのほかも
厭別恋　さるてふ名をそとまぬ時のなさ世なりてをそんまくら
鶴声近枕　淡松の梢のつるの声ふくる毎うたたねをそ
十月四日鷹司京極昔の関白殿乃池のるてよくく人く
漫吟つ一中ふ
初冬朝　杜そめし一通の井川はをうてや散もるせん（りさこるらん歟）
池水鳥　くもさて空うの松も水鳥もなき世の波の浪そそふ
懐旧多　むかしとまるまるそ行のなのむつ川ふるつのよまくらそ（七歟）

五日修理大夫の家の月次よ
落葉　世中はさもつくさまなるぬ花の嵐にちる木葉ふ
橋霜　鶯のひさしる橋の雪消くて日影やそ新もそるん
尺恋　思川身をくふちふ流めてもうさそ名ばはよをやおくん
時雨（當座）　ふるうにたなそ木のそふるくもちくれふ
厭恋　我ふをくのくつくんを思ひ人をそつまくせく
市　世をそいくなるさもちく波もさまる市そ立まる

六日大膳大夫の家よく漫吟のうたふ
初冬衣　神な月くも姫もさかつく衣そまつきをう神そそ
雪雲恋　七つそ思ふくつきもりんさをのふるまくらをまくあれ（ある歟　くふ同上）

岸頭竹(祐類)くもん再逢きこの外竹もちく(祐類)家安らかなおくれん

八日日下部敏景をもとめし一月次よ

初冬山嵐　木葉もちるさの外の秋の山嵐もさるやそのもみぢめかくん

霜夜寒月　あしたおきいでくる風もさえまさる秋の月を共に

海上雲遠　みそきしおきつ汐ふかみの浦よ(祐類)渡るはまちを釣り

水鳥(當座)　梅ちえよさぬるくしと水るるよともの乃えよまくる

雪の心色　なくくさるをもさうる色よむくんをはのおくさもし牡

山寺　やまでや窓もさるる貝法のおよ里人法をゆくさる

十二日右京大夫の家よりく遠ふのもとーふ

里初冬　みそきてのそも嵐の木葉かなさきものさ乃杜のさ通

(子規)

誓(言類)恋　ほしも浦ふせちくさもちくんもちくんの浦のふのさ幹を

夜過関路　もの人関をいまさきもよの浦の波のとさくてるる女人

十五日細川上総介氏久家よりく遠ふのもとーふ

木枯　枯ちくなのそのはお杜の名よおよをもにのさみえ(て類)ましし

書恋　恋くれのまのさる斗をたのめつる夕雲まおさ日影とをまつ

山◆　あもるる山なをいとや世中のうさをそそてかさのくらん

十二日或所の会よ

時雨易過　ぬるさうさき海おうさのもち雲もさまあぬまおくさ時雨い

濱辺千鳥　ちくふよや夫くちはし系行のこをやうく濱よよ鳥もくん

暁燈欲消　明ぬまいうつろい消ぬ月をのもうそのるとりい乃窓

十七日会於大浦家の月次

夕時雨　夕つく日影をそふやうつむらんもとるも秋のふうて
庭寒草　まふさき庭のよもきふ蓼ともの芦るも白き霜の下風
江上船　おきつ風入江のもろこ拾ふとてとまれる小舟又そゆふ（當座）
初冬　くれのまに〳〵時雨の木葉のおもてもさく雲の静やうやのこぬらん（も歟　八四上　七四上）
炭竈　持つき菊と蓼の白炭も焼山いつるもとりしたみち
寄橋恋　ひろきて併とめよとも橋のかうむふ氷のつみふ
暁鶏　やまふるの枕をしれまもなからんもとふきき

廿日草庵月次

松間霜　さしえ（打歟）ひまつるまの松下葉をつきもちるあらしかな

田残鳥　いつ秋ん冬る淀名の淀田ふ海とうきぬくたの秋
寄夢恋　祢ぬまくん枕さくふあまくるるの秋をいのもあるる
夕雁鳥狩（當座）　鳥のふしをまかくめ雁もふかくまる雲を冬風の時へ
別無書恋　くれなゐさるの庭のかふもふ秋のるの袖くもくん
夕　野　まよりもるくさうくをほしくのふ秋るふの夕風
廿三日恋法院会ふ
時　雨　そかるみのまふのよふあくるさへ袖くふる時雨
水　鳥　氷るくふかふ浦もはしるるのたのむる羽のふ波
恋　夕ちぬをふいおくへ向くも秋を雲くもくふおもの雲

十一月二日祥理大夫の家の月次ふ

暮天殘雁　雲端引盡數行書（お夾）
遠山見雪　杏花さくをへてうすくみのそめそむる空乃氣あけ
岸頭待船　春そはるさ川ふの舟民やさ口うつぬそをにうらん
當坐
竹裏鶯　をそうたのすきし風といてそのく垣ねふ堂るそ鳴
夕　立　なる神もまつそぬをまつうそ空の秋まの稲妻
恨　戀　又拔てをおふそ戀ふそその思ひつやそう
野水少人閑　ぬ舟のあしをりふもものをそる風のさ法
八日日下部敏景ちかし一月次よ
逕寒草　ま落そ庭のうへきう髪そものおほも白さ雲の下風
狩場雪　ものふを思ふなそ出さんそうかそのをのうそそを

忍涙戀　せきかねつなそうへのそでもあふれそう淚を
當坐
時雨晴　めくる日いそうそその内なうまそる家よ新そのする
宮の野草　玉ゆもも、のよからんこそうそ出さ人のまてはそ露
山家鳥　鳥も又玉ひやそうん同る馴くる名もうぬ奥のふ人
十三日或所にて讀初雪
曉木枯　五四の月の柱の歩柱もうるうそもさ新そおくせそ
野　霰　いく州雲そそうそるものそうやもの
宮鶴戀　私の鶴るをそふ道もそふそ
宮屋戀　淚るくいそ八四八のけさんふそもやみそもの延
原　老ぬそうみ一世の人をるぬそもおそ一淚もろ京乃夕せ

十七日 兼題 十晴の夏の月

遠雪 なき跡の嵐やさゆるあけ方の月のさえのかず添

千鳥 打ちつれて友なふ声もあはれ也波の寒さを

祈恋 せめて先涙ぞさそせ恋ごころみだれ風吹ころとも

當座 椎紫木枯 少の残りし後の梢なれ(おちる類)ども変らぬ

窓の月 外恋 おのまゝも寝ぬ夜つもれば恨ぞ多き独ぬる夜の

山家夜雨 いく秋ぞ軒のまばらの松のもるあめうつ音もあるぬ事は

十九日 高松大神宮法楽歌合ふ

河寒月 川風のさえ渡るせの底までかげもうつろふ氷なりけり

枯野霜 枯はてゝ霜をかさねし草の原の法の実(衍字)

尋恋 あるまじきもりくいまぞ人法の師のさとりもあらぬ恋の山路

廿日 草尾月次ノ

氷 きえの市に出るる人をそれぞれの堅くぞ見ゆる浦風

雪 月花もかくやみるに堪ぬ雪のもとをさそひて降るみ吉

旅 枝のその雪をみくもかと仮をつまぬ山ごえ(枝類)やゆく

當座 枯野篠 その原法とゞめて篠のそのまゝをみるよしもがな

窓の海人 人もまぬ夜の庵のくまぐまに月にもる浦の苫屋

山館燈 あはれなりもゝあらし峰の里となくる秋の栞屋

廿三日 恵法院のきの会

寒閨月 仮寝する枕の氷よるしもの閨もる月ぞもし夫、

風前雪 りをふををめくる人姿をいそがしもまふまさる秋の風
行路市 秋さり市場のうらや人おそくうたふ杜の下道

廿四日 右京大夫の家よりく誘ひあるまゝ
獨鬧水鳥 きゝなれぬ水鳥の衾をとゝほして秋そつもぬ村雲の月
（に同立）

雪日 雪ふる日ばかりなるかの空もうすら日ハ社て消るかけろふ
名所駅 たゝもむかしの跡ふるさる里の梢よさる砂の雪
庭合歓 ねむの木の花のおもをうつしなもものうきをやうやう
廿五日 夜山名淨土寺同志ゑお浦草庵にまゐ
らむとし次よよみうるみてふ
浦千鳥 ひのうらなるの汝ひまそうまのこゑうる友まるふ
（ま松）

雪嵐 雪ふくいなもあゝのおもふをもちのおもふ名ことはを移
社頭祝 家をおもふもる住よの神もく宵やまつのそのそ

十二月四日 右京大夫家にく会ふ

冬暁天 鶯のひとよを経て梢まふふるまのうす氷の林
雪冬述懐 ふる日数おもふまゝまつもるもの花の端
雪冬後悔 ふる雪の枕なくく松川やいるの雪の床寒もるも

五日 修理大夫家の月次に

冬天象 冴るよの影なき月の声ふくる乳に落る白雪
冬植物 葉の変し杜の梢も宿る木の松の緑そみそめよう
冬人事 老らくのををむふる学をもきをとるのほの学ふ

寒樹（當坐）　ちんまてもる人なきに秋の花もそも本毎の枝も寂るみち

待恋　つまなきことかこつ人侵みそのの月ふめもそまつよもやきき

市　里人のもつまのすにむめも波ささささまるり川渡ふ

八日日下部敏景奥野乃月次よ

夜衾　ふ妙のあさて衾うささに風も吹もさ秋の雲

漸春近　門のみよこむくふ孰皆人そもそるろまおさんをつく

釈教（當坐）　ささとぬ法の二の道絶くりの悟をさとるもの（実）

椎紫嵐　吹つて家の嵐よ時雨る柱のうち雲のさ乃月新

山家恋　なささあふ人の雲ハ苦もぬ秋よ袴くつりる恋も

原獣　庵もしおをやもそふおのおのまれからつるみのこハ

（左拾）

十日高松神前哥合

薄暮深雪　淡そむるまも柱ぬ屋の西のそ里埋むをそるくき

暁更神楽　ふも挽ち世の浪のそそふんかそし附を神やうくん

披書逢昔　水ささの浪よふもるささ雪付ふ雪もかそぬ昔をそそ居

十二日右兵衛佐鎌倉へ下向あるつそそ近日とて

草庵おおそしく淡ふのあるしよ

行路冬草　ふ浪のまとみ吹ふふそそをそめむ酌のそもそろふ

不洩思恋　学のささふ浪のみえなもせんおりんのそよ神よあるる

連夜旅宿　名ハしまよそそのまふ称よ称くも称よ出ぬ吹

十三日恩徳院の合て

雹濕旅衣　たびそめころの麻衣ぬれこほるみぞ出ふとまる坂の下雨

契歳暮恋　いそくしまもおくぬまのそこもふようてむすぶ契ふ

心静延壽　雪なるゝよ多とやうふゆふ梅の新めくるらん

十四日るすゐ二月子う遠例大事なるもふ野於

之基住吉ゝゝ新ゝゝ百そゝ法楽をゝめふ

早　春　雪月のほよ三月の名もむつまじと名おもう法越るを心

夕惜花　風そゝき人うつ時とうをるのなうこひもちうく花のつるゝ

夜　橋　白妙ふ匂ひまさるたちもむ月のまく人社おりふ愛(し)

野　分　たゝ神さる玉つさまぬ萩のさふ野の風の返(つと)

嶺(峯)樹深雪　杉人のこ秋のことさ年ふうつむさゝる

見　恋　ゝにふまるめもの秋ふ袂ゆたゝおうぬえうにとゝる

山家鳥　いてまをも沢みゝくは尾ものおくのふよをの落ん

十五日草尾ゝ人ゝまゝく淡うまふみゆふ

寒松霜(庭)　よもひゝ松ゝをの玉ゝゝ新事ほゝゝゝゝの宿

僧見恋　久才のそほゝなる人のせゝみるゝまゝくうりとの

社頭鶏声　山のつゝおくの秋るまふ坂の神よ明ぬゝゝを向也

十七日ゝゝ浦の家の月次よ

寒夜残月　風ゝゝく冰なゝゝの形(ゝをしあき)や月も流ふ雲もうん

早梅似春　乙下一もほゝまをなゝくみその梅ゝ枝

旅行夕鐘　新ゝる神のやうほさ出淡やよ里に尾おりふん

當座
寒樹嵐　杜のもみぢ葉も嵐ふるおとそはげしき
恨悔恋　ひとよゆる袖もかたしきなれぬ浦風さむく
山　白波の音をかたしく山ふかみ人もとひこぬなり
十ムつの修理大夫の家にて聖廟法楽百首の中に
山　霞いろもそこともわかぬ山ぢかな
獣　花山猟おもしろくも花ながらやくもふかくも
首夏　くれそむるをを隣の井垣よ衣かたしきうつ乃花
野萩　ふもとみよりくまもなんくさのいろ〳〵野べの秋萩
遊雪　ふるさとく消んとそおもふ九そやその山路く杜乃夕人
絶恋　人ごころもみぢそかへ(もし本)三年経く秋ぞもくいたけりまの杜

田家　やそ年毎もふるよりそぬるうるおふ浮ふ田の仮庵
廿日草花の月次
月前雪　庭白きものゝふるをそふ浮ふるをみつく月影ふ
炭竈煙　木をたちをのくりつゝ炭竈の烟ふるまふあらし八
窓鏡恋　影やそも境のそこみるもうをあらふ浮のうき面ふきぬ
松川寒月　ふもとの松をたゝく川波も月の桂をそふるふそそく
見形厭恋　ふるふおもちふ浮そをふまのまの契そおくやぬる
山亭松風　み友ともまつそふかとふもとのあらしも
廿一日侍ふ入道浄元の家にて遠ふ望ふ
時雨　雨ふふるをふ(もし本)時のおふ小松ふそまつひし家の松風

歲暮くるゝも惜むこゝろの袂かな
契　遠き空ゆく月に君ゆくへ乃幾もふきまの月
河鷺　花ゆふ江のちかきをぬきて絵の筋乃の髪

廿二日右三閣佐義鏡東國發向道中にて十
ゝよみてくうけ給はりて侍ふ詠しれふもの
牡鹿のねるまでわれもまつ人とゝゝてゝくんさの赤詠
君ゆくをゆふもんもぬきへ侍るんゝそみへくまれ
さりなく待てゝ出ゝなち我を十まれ我も乃ま
出んふへらんをゝ詠の月ゝゝて君もゝる我も三れ
二のゝふもゝふへてゝゝそ三ひきやゝ言ひまゝと人のゝゝまゝと

我々ふゝゝさらしてのゝやゝきへちゝのゝを宿の共短
君ゝ住やゝの柚のゝゝぬをたのむ法ゝ(本)(その一本)尾おひ
かきやゝるやゝみかほしつの浦ふ打てゝふくれのゝ
そひまぬ世のゝつゝをゝ文ふもゝぬよ仰ゝる我深ふ
詠めるん神もゝゝへゝゝゝ我ゝゝゝの江の月

同附平頼資ゝへ餞ふ申ゝ侍る
武士のいさむこゝよゝゝもつゝふやゝまゝとのそ
ゝゝへつのゝゝへ友ゝせよゝゝのゝ菊ゝゝふゝゝも
あゝゝまゝゝをかゝゝ志ふゝゝふゝけをいゝゝれん

廿四日修理大夫の家ゝゝ詠ふのあゝしふ

冬暁　みのもの山ぎはやこのうつくしきをさそふかとるまくら
幣　忠岑の世の契さへあさのきぬやわれもろ人よもおうるらん
園　行あまさへ氏の家ゐのその行さへふる風なるさき
廿九日菅原之貞もとゝ遠ざ
雨連霜　秋日さびしの松の法斗おそて落る葉乃下露
歳暮　心　くるをもいそくまい花ぬもものこゝろやさして
且見恋　はるかつくるもの点るもゝさふ事へ新ふ並へて
故郷雨　古てふ思ひ出をぬ百の底いくよの人の雫おほふらん（元一本）
古寺鐘　小和尚やほさ遠のあをとる太山おろし里の月

十二日修理なま家の清こを見くよみうさ
くみ一中ふ
短夜夏月よその月経き筆のつのまみのる恨ハきもおさ一
六月祓　六月の七瀬の系のかよもき流水麻よやうもきうん
暁逢恋　鳥るくなよを朽の別路とタの捨あさハうしし
旅泊　あおを波のもくもかてその泊一孤よおるおせ
四月廿一日ふそ亀彩造ふう清を作る
廿八日同家尚ま月次始あまふ
竹亭夏来　宿ふさそのまよまる竹のまのはそなる秋夜きみう
遊（當坐）　絲　乙清人きふ松や緑のそよふしりらむ

月　なまりを月も巴人のおりとうるうん元のまのを杜（業平）
忘　恋　ニやをぬをこるふ一そ打つきたるよをまハやあそこよ
山　家　ふほき谷のふそのかそつふうともの指や宿のをそま
述　懐　ワのほををほしもさうそぬもの法話よまハまぬま（廿本）
廿九日あるふくくく清おふみ一中ふ
残花在何　るくん和月の山の桜のうこ帰本の風ふ花のほそる
夕採早苗　ふる種よタ雨ちふく乱るやうをぬま苗のまもめん
恨泉絶恋　多をふふりほの烟絶まぬおそふうつむ日数まふ
江孤舟　夕清よ人江のをるまるまま支なー山舟をさうとり
五月四日右京大夫乃家ふく月次よ